



農業体験から「食」を学ぶ

「農育（食農教育）」とは、農業体験を通して「食」の重要性や農業の役割を学ぶことです。自然環境や命の大切さを学ぶことにもつながり、自治体や学校で取り入れるところも増えてきています。また、遊休農地を有効に活用できる点にも注目が集まっています。

訪れたのは、北島英司さん（丘珠町702ほか）が所有する農場。ここでは、「市民体験農業を考える会（近藤勝会長）」が、市内の小学生・幼児とその保護者を対象に、親子体験農園を開いています。



鍬を使って指導しているのが北島さん。参加者の皆さんは、プロの見事な鍬さばきに目を奪われました（北島農場 5/21）

参加した親子は、市民農業講座「さっぽろ農学校」を修了したボランティアの皆さんや、北島さんらの指導のもと、タマネギやトマト、キュウリなどの苗を、慣れない手つきながらも一株ずつ、丹精込めて植えていきました。子どもたちは「作業は大変だったけど、楽しかった」、「早く収穫したいな」と、息を弾ませながら話していました。



真っ赤な食べ応えのあるトマトが育つといね（北島農場 5/21）

今後は、草取りや土寄せなどを定期的に行い、夏から秋の収穫を待ちます。収穫した後は、取れたての作物を使った調理実習も行います。

すでに農業の第一線から退いている北島さんですが「今の子どもたちが、少しでも農業に興味を持ってくれたら」と、農場の一部を貸し出すと決心、今年で5年目を迎えました。北島さんは「農業のありがたみを肌で感じた子どもは、食べ物や命の大切さを忘れない大人になりますよ」と、言葉に力がこもります。



小学校と地域が手を結び「稲作体験」

次に訪れたのは、サッポロさとらんど（丘珠町584-2）の体験水田。ここでは、苗穂小学校（北9東13）の5年生とすずかけ学級の児童、苗穂連合町内会（湯浅義昭会長）の皆さんが、一緒にもち米の田植えを体験していました。



地域の皆さんに見守られ、励まされながら、子どもたちは一生懸命に田植えを体験していました（サッポロさとらんど 6/7）

さとらんど指導員から説明を聞いた後、子どもたちは早速、田植えに挑戦。始めは「ドロドロで気持ち悪い」、「泥から足が抜けないよ」と言いながら恐る恐るだった子どもたち。中には「こんなに大変なんだ」とポツリと漏らす子も。でも、町内会の皆さんの激励も手伝い、何とか田んぼの中を歩けるようになり、苗も上手に植えることができました。

東区は「農業体験施設」の宝庫！

「サッポロさとらんど」に代表されるように、東区は農業体験ができる環境に恵まれています。皆さんも、農業体験を通して「食と農業の関わり」を肌で感じてみませんか。

主なお問い合わせ先

☆サッポロさとらんど ☎787-0223

（市民農園、収穫体験などの総合的な農業体験交流施設）

☆JA北札幌経済センター ☎781-7393

（農家が開設している市民農園の紹介）

☆経済局農政課 ☎211-2406

（市民農業講座「さっぽろ農学校」など）

※市民農園の募集期間は、一般的に来春になります。諸条件は施設によって異なりますのでお問い合わせください。

町内会女性部の皆さんも田植えに挑戦。「私たちも田植えの経験がないので、子どもたちと一緒に勉強ですよ」と話していました。9月下旬の稲刈り作業でも、小学校の児童と町内会の皆さんと一緒に行う予定です。この稲作体験は、小学校の総合学習の一環。町内会は福祉のまちづくり事業の一環として、児童の付き添いや補助、送迎バスの手配などを受け持っています。苗穂連合町内会の八田力副会長は「地域の大人も、子どもと一緒に楽しんでいます。稲刈りの時は地域の先輩方が、かまの扱い方や縄の縛り方を、きっちり教えますよ」と話していました。

